

4 VOL.

高校生 未来 サミット



高校生未来サミットは今年で4回目を迎えました。第1回目となった2019年は、1泊2日という短い行程に関わらずすぐに高校生同士が打ち解けディスカッションが実現しました。「なんで2泊3日じゃないんですか?、もっと長くしてほしい」という声に「大人の事情でごめん」と返答していました。予想以上に初年度から私たちが考えていた「高校生ならではの目線で未来を考えてほしい」というテーマを実現してくれました。そして大人たちの予想を毎回いい意味で裏切ってくれることも大きな楽しみの1つです。回を重ねるごとに私たちの意識も変化し、周りのサポーターも徐々に増えてきたという実感があります。

今回の皆さんはこの研修場所でも積極的に参加し、みんなが1人ひとり存在感があり、個性を出して発言し、毎回その発言が面白い。今回は荒天のため急遽、飛行機の時間が早まることになりました。短いディスカッションの中でやはり個人的な意見と未来へのビジョンを語ってくれたことが何よりうれしいことです。今回の旅の行程を振り返り本誌にまとめました。この大きな出会いをくれた皆さんに感謝!

来年度、2023年もまた新しい高校生同士の交流が生まれることを楽しみにしています。皆さんに会えることを楽しみにしています!

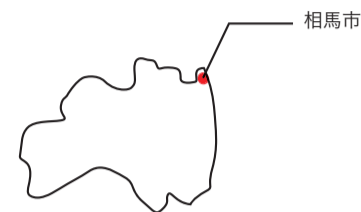
DAY1 9/17 震災を僕らの目で

7:45 伊丹空港集合
 8:40 福島駅西口出発
 9:00 伊丹空港出発
 10:25 仙台空港着
 10:45 仙台空港出発
 仙台空港～新地 IC
 11:30 玄米の全袋検査見学
 (相馬市野馬土)
 12:00 昼食 (カフェ野馬土)
 12:40 出発相馬IC～浪江IC
 13:40 請戸小学校視察
 14:30 出発
 15:00 大熊町
 バスの中から見学
 15:30 浪江町道の駅休憩
 17:30 土湯温泉
 YUMORI 到着
 18:00 夕食準備・夕食
 19:00 映画鑑賞・入浴・
 グループワーク・
 自由時間

1日目となる9月17日。仙台空港からバスで相馬市へ。

報道で伝え聞く遠い被災地福島で、震災・原発事故から11年経過した被災地を知る未来サミット初日。そこに住む人々の生活や思いを受け取り、未来に何を伝え活かせるかを考えたい。

農家自ら、全部調べる。 浜通り農産物供給センター (相馬市・野馬土)



仙台空港からバスで40分程度南下し、福島県相馬市の浜通り農産物供給センターで原発事故翌年から続く玄米の放射能検査場を見学した。この事務所は震災後、避難区域となった南相馬市小高区から移転してきており、国内外からの支援を受け、今では自立して運営されている。すぐ近くの相馬港の民間米倉庫に数千袋保管していた玄米が地震直後の津波で流されるなど、何重にも苦難を乗り越えた農家の拠点であり、被災地視察ツアーなどを運営する復興の重要な場

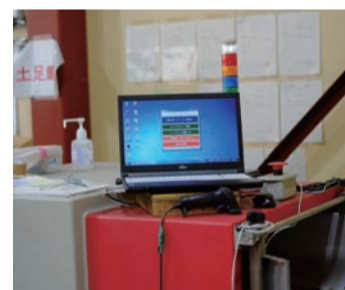
所となっている。

玄米の全袋検査は、原発事故翌年から始まり、福島県で栽培される全ての米を検査してきた。検査結果は米袋に貼られたバーコードで確認でき、福島県産米の安全性の担保となっている。数年前からは原発周辺の12市町村が全袋検査を継続し、それ以外の福島県内の自治体は、旧市町村単位で放射能検査を実施し、県内全域で基準値以下（ほとんどが検出限界以下）となっている。高校生未来サミットでは毎回この検査場所を見学してもらっている。福島県の農業粗生産額は原発事故以前に回復していない。「風評被害」があるからと言われていたが、この被害は原発事故が起きたことによる「実害」である。風評被害では「根も葉もない」ことにより食べる人と作る人を分断することにつながり、本当の責任を見えづらくする。つらいことだが原発事故により、放射性物質は農地を汚染した。福島県の農産物を好きだった人にとっても、福島県産を選べなくなったことも大きな被害である。この事故を起こした東京電力と



原発を推進した政府にこそ責任があり、それを曖昧にする言葉が風評被害である。

「検査したから大丈夫です」と言わなければならない農家の気持ちを知ってほしい。原発事故がひとたび起きれば途方もない被害が長年にわたって続くことも。それでもそこで米を作り、うちの野菜は美味しいよと農家は元気になってきた。「被災者では終わらない」覚悟と未来への希望を失っていない農家が高校生たちを迎えた。



玄米の放射能測定器



カフェ野馬土テラスでランチ



検査結果はQRコードで辿ることができる



玄米全袋検査器のシステムを学ぶ

確かめに。



11年前の浜通りを襲った津波の爪あとを見る。



震災遺構となった 請戸小学校で 防災を考える

請戸小学校のある浪江町は、福島県浜通り（沿岸部）の北部に位置し、双葉郡に属している。浪江町は、海、山、川に囲まれ、豊かな自然を誇り、大堀相馬焼やなみえ焼そばといった名産品でも有名。請戸小学校がある請戸地区は、東日本大震災で154人が津波の犠牲となり、その後災害危険区域に指定され、現在は人が住めない地域になっている。しかし請戸地区以外の一

部の地域では避難指示が解除され、居住ができるようになるなど、復興に向けた取り組みが進められている。

震災の記憶を後世に伝えるべく、2021年10月から福島県初の震災遺構として請戸小学校は開館した。当時、津波に襲われ、校舎の2階まで浸水したが、校内にいた児童と教員は学校から約2km離れた場所にあった標高40mほどの大平山に避難したことで、奇跡的に全員無事だった。

請戸小学校の入り口から中に進むと、震災前の浪江町の暮らしを伝える写真、震災時の状況が記されているボードが展示されている。絵本「請戸小学校物語 大平山をこえて」のページをパネルにしたものも。「被災した人々はどのような状況にあってどう対応したか、起きた事実をサンプルに伝えたい。」とは絵本を



作った団体の方の話。「災害はいつなとき、誰にでも起こり得ることなので、参加した皆さんの身に置き換えていただいて、普段から防災の備えをしておくことが大切だと思います」。

大熊町の復興は 「小さな拠点」から 広がっていった。

請戸小学校を後にし、原発立地地域である大熊町へ。大熊町は福島第一原発事故により町内全域に避難指示が出され、町民の多くが今も県内外で避難生活を送っている。町役場や駅などを含む町中心部は厳しく立ち入りが制限される「期間困難区域」となったため、町内の放射線量が低い、もともと田畑だったところを整備し、新しく役場庁舎や町民の住居などが集まる小さなまち「復興拠点」が作られた。そこを拠点に、少しずつ生活の場を広げていき、平成31年4月

自然の力を目のあたりに



に一部の避難指示が解除され町内への帰還が始まっている。令和4年6月には「帰還困難区域」のうち「特定復興再生拠点区域」の避難指示が解除され、約11年ぶりに町の中心部であった区域に立ち入ることができるようになった。

しかし、特定復興再生拠点までの地域は、主要道路からわき道にそれることができないように鉄のバリケードが設置され、民家への入り口もバリケードが設置されているという状況が続いている。私たちはバスの中から、住宅がツタに絡まれ、のみこまれていく様子を目の当たりにした。

震災から11年たった今、東日本大震災や原発事故のことを

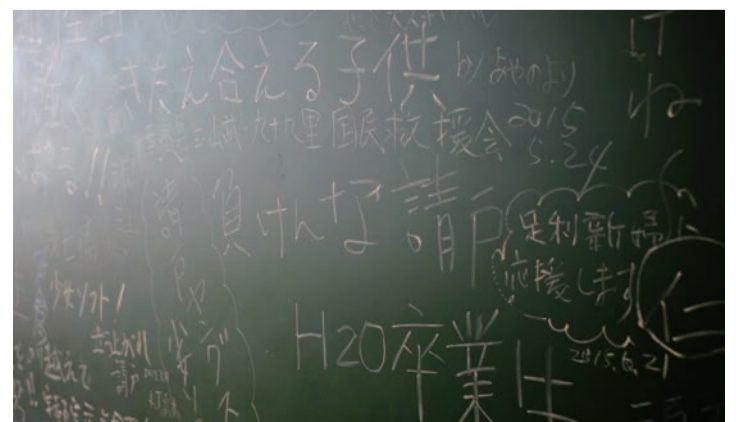
改めて、自分の足で現地を訪れ、自分の目で見て当事者の方から話を聞き、事実と向き合うこととなりました。



ノートに想いを残す



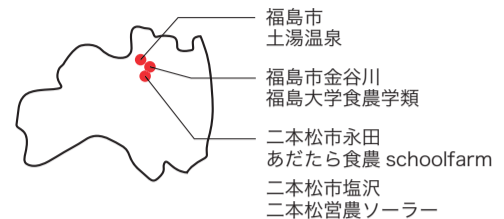
津波の高さを実感



黒板には訪れた人たちのメッセージが

DAY2 9/18

未来の畑の景色 を探しに。



- 8:40 土湯温泉
YUMORI 出発
- 8:55 小水力発電視察
- 9:30 二本松市 アグロエコ
ロジー農園体験
- 11:00 ソーラーシェアリング
視察
- 12:00 福島大学着附属農場
見学
- 12:30 昼食 (福島大学)
- 13:30 大学施設見学
- 16:00 福島大学出発
コラッセふくしま買物
夕食準備、夕食
(みんなで地元野菜で調理)
- 19:00 ワークショップ意見の
共有とまとめ

土湯温泉の小水力発電、二本松市の有機栽培・不耕起有機栽培の試験圃場のあだたら食農schoolfarm、太陽光発電の下でシャインマスカットや大豆栽培に取り組む営農型太陽光発電所、福島大学食農学類の教授陣から研究施設視察と盛りだくさんの学び。

新しい取り組みで未来を切り拓く挑戦者たち。誰からも奪うことなく、食・農・エネルギーを生み出す生業は、これからを生きる高校生たちに引き継がれ、さらに発展していくだろう。

「食べるを学ぶ」農業の学校。 あだたら食農schoolfarm

福島県の中央北部に位置する二本松市。市内永田地区にある「あだたら食農 schoolfarm」は耕作放棄地を活用し、二本松の有機農業や不耕起栽培などを学ぶことができる場だ。身近な農地で誰でも実践できる不耕起栽培やオーガニックガーデンの維持を、参加者が工夫しながら開発する「参加型実証農場」だ。

あだたら食農schoolfarm の3つの指針

- 1.アグロエコロジー
自然の力を最大限活用し、省コストで安全な生産を目標とする。また、農薬を使わず、持続可能な農業を実践。
- 2.耕作放棄地の活用
近くの耕作放棄地をなんとかしたい、という人は多い。無理なく管理できる範囲で耕作放棄地を農地に変えられるとしたら。農薬や化学肥料を使わず、農業機械も使わずに安全な食を自分たちで確保できるのなら、新たな農の担い手はこれから増えると確信している。

3.消費者との連携
消費者はどんな食事をするかによって、農業の方向さえ変える選択権を持っています。農家も同時に消費者。農業生産と食の消費との距離を縮めていく事ができる。

現在の農業の状況は農家の危機だけでなく、食べる人の危機でもあり、自分のこととして考える必要がある。自分の食べる物は自分で作る「国民皆百姓」で、みんなで作るのが良いと思いませんか?農場は、土を耕す「耕起区」と土を耕さない「不耕起区」、そして「オーガニックガーデン」の3つの区域に分かれている。また、慣行

栽培、有機栽培、不耕起栽培とさまざまな方法を試みているが、正解はないので試すしかない。栽培した野菜などは分析したり、実際に食べ比べたりして、それぞれのメリットとデメリットなどを参加者が実感し、話し合ったり、学んだり、楽しむことができる場所となっている。

当初の計画では、参加者の皆さんに夕食のカレーやサラダの材料となる野菜をそれぞれ収穫してもらおうと考えていたが、あいにく端境期となってしまい、残念ながらそれは実現できなかった。しかし、耕起区と不耕起区のトマトを食べ比べたり、近所の大工さんが栽培したスイカをごちそうになったりと見学だけではない体験ができた。

原発事故という人類史的惨禍に見舞われた福島県だからこそ、アグロエコロジーの魁の地であるべきと考え、未来に向けた取り組みを地域に広げて行く。

電気も畑の 二本松営農ソーラー

次に高校生たちが向かった先は、あだたら食農 schoolfarm からほど近い二本松塩沢の「二本松営農ソーラー株式会社」。文字通りソーラーシェアリングを行う会社として2019年にはじまった会社だ。営農組織は二本松で有機農業をしている農業者が主となり6haの土地を皆でまとめ農地を集約化。ソーラーで売電するだけでなく、作物を生産する収益をダブルで得ることで新しい農業のスタイルを実験的な取り組みも行っている。

農場を案内してくれたのは今年から農業者として働き始めた塚田晴さん。高校から有機・自然農法を実践で学んできた。塚田さん曰く、工夫次第で営農はおもしろくなるという。「例えば」と見せてくれたのが、ソーラーシェアリングの支柱に鉄線を張り巡らせており、これ

小さな エネルギー 革命。

小水力発電を見る 土湯温泉

福島市の温泉どころの1つ、土湯では橋の袂に立つ大きなこけしのお出迎え。温泉と土湯こけしなどの手工芸、観光の賑わいだが、震災直後は多くの避難者を受け入れた宿泊施設と化した。しかし「若旦那」と言われる次世代後継者が街を盛り上げ、エネルギー問題も観光に帰結しようががんばって来た。豊富な水量で発電を試み、同時に温水でエビ釣りなどの新たなお楽しみも組み合わせている。我らサミット一行はぐるりとバスで周り、温泉街を後にした。



食べるのも、もちろん学び



耕起・不耕起栽培のトマトの食べ比べ



太陽光発電の下で立派に育つ大豆





作物の一つ。

はシャインマスカット用の鉄線だと見せてくれた。そのアイデアも面白いが、この鉄線も自分たちで施工したというから驚きだ。内情を特別に高校生たちに教えてくれた。鉄線施工の見積りを見て、800万円という予想外の金額に驚き、一時は考えを改めようと思ったらしい。鉄線の部材を自分たちで取り寄せ、一部業者の方をお願いしたが、ぶどう棚を格安で完成させることができた。総額200万円で施工することができた。



太陽光パネルの下で栽培されるシャインマスカット

さらに驚きなのが、ここで子牛の放牧も行う予定という。ソーラーの下草を飼料として子牛が食べる。動物をうまく使い畑を荒らさずに下草のメンテナンスを行うユニークなスタイル。これもアイデアと実行力の為せる技だ。農業をうまく循環させることで無駄をなくし、結果的に農業

が楽しいものになる仕組みを作っている。高校生たちからは素直に驚きのリアクションがあった。農業とエネルギー、そして暮らしまでのグランドデザインの実験のフィールドとして存在感のある取り組みを見た。

高校生のための特別講義。

福島大学食農学類

福島大学食農学類は2019年にできた新設の学部だ。我々、高校生未来サミットに参加する高校生たちを喜んで迎え入れてくれた。さすが、新設の学類。研究室は最新の機器が並ぶ。何を隠そう今回のチームを支えてくれたのは食農学類の大学生たち。高校生たちからしてみれば数年後の自分たちという目線もあったに違いない。親しみもありながら尊敬もしているそんなチーム作りに貢献してくれた。

て見ていた。ここ数年は大学でもコロナの影響を受けて、実習の回数は減ったというが、大学に近い圃場で米を中心に、実践的な栽培を行っている。土に近い実習をし、白衣を着て研究もする。どちらかに偏ることがないのがこの食農学類の魅力かもしれない。実践においては高校生たちも負けていない。稲の穂を真剣に見るその姿に未来の農業を支える姿を見た。



食農学類では食品科学、農業生産学、生産環境学、農業経営学という4つの主なコースに別れている。さらに専門性の高い研究室に別れているが、高校生たちも興味津々。農業用水の流水を実験する機械や、食味をマイクロな世界で分析する世界があることを目を丸くし



福島大学食農学類の最新の実験施設



めっちゃうまいやん！
**福島の食材で
 みんなで作ったカレー。**

一緒に考えた未来。

**みんなの気持ち
 が近づいた**

「じゃんけんぽん」。食材を前に、なぜじゃんけんの掛け声が会場に響く。2日目の夕食は、班ごとにカレーをつくった。限られた食材の中から、自分たちの好みの食材をかけ、班の代表がじゃんけんで勝負していたのだ。準備されたものは、農民連の有機農家から仕入れたじゃがいも、にんじん、パプリカ、ナスなど旬の野菜にカレールー数種類。それぞれ選りすぐりの食材を手し、いざ調理開始。ある班は、カレーの具は、ゴロゴロ派か溶けている派かと、既に相談済みで、手際よく作業がすすむ。またある班は、とりあえず野菜の皮を剥き、またある班は、手順を念入りに確認。方向性が決まれば、話しながら、手を動かしながら、各班動きは早い。できあがったカレーをみんなで食べる。どの班のカレーもおいしかった。食べ終わった後の片付けもみんなで手分けをした。後片付けも楽しい。ここでみんなの気持ちが、ぐっと近づいた気がする。

最後の夜の食後に今回の旅で学んだことを高校生たちが発表した。その言葉のどれもがオリジナリティがあり他者を尊重していて、かっこいい。ここに参加したみんなの感想を一部掲載させていただく。

感想 高校生より

今回の学びは、私はこの事を知らない世代に伝えなくてはいけないなと思いました。

私は自然が大好きですがもっと自然や環境に尽くしたいなと思いました。

3日間を体験してとてもよい体験になりました特に小学校の津波の怖さを知れました。津波の迫力にはとても驚きました。もし災害が起きた時にはとっさに行動できるようにしたいです。3日間たくさんの友達ができてとてもよい体験になりました。菅原くんが自販機で当たりがでたことがとても印象深いことです。

今回のプログラムでは大阪の高校生をはじめとした様々な人と出会うことが出来ました。

この偶然繋がった人間関係を大切にしたいと思います。また、この企画に携わっている全ての人が熱を持って参加していると感じました。福島の今と向き合うことが出来た貴重な機会になりました。最後に農家さんの言っていた、「農業に正解はない」という言葉が印象に残っています。1つの

ことを正解だと決めつけて、他を排斥しては成長出来ないと思いました。

この企画に携わる大人が持っていた熱量に心を動かされました。これから教員になる上でこの企画を通して学んだ知識、経験、考え方を使って自分らしさを磨いた教育を行って行くことが目標です。

様々な場所に連れて行って頂き、ありがとうございます。1 番印象に残ったのは最初の日にいった全量全袋検査です。自分はその様な事をしていて全く知らなかったの、周りの人は福島の農林水産物に偏見を持っているけど、やっぱり安全にはちゃんと配慮してるんだと納得しました。また、広報はどの様になっているのかとても気になりました。

みんなと楽しく意見を共有できて良かったです！これを機に色々な人の意見を聞いてみようと思いました。

この機会をくださってありがとうございました！

常に未来のことや次世代のこと地球温暖化のことなどについて、学んでいきたいです。

福島から遠い大阪の高校生の福島への印象や大阪のことなど貴重な話を聞くことができました。また、福島大学食農学部の方といろいろな楽しくて貴重な話を聞いて良かったです。新しい友達ができて嬉しかったです。このようなサミットに参加できて

よかったですし、また来年も参加したいです。

このプログラムを通じて福島県のイメージが 180° 変わりました。プログラムに参加する前は震災でズタボロのままだと思っていたのですが実際には復興も進んでいて再生可能エネルギーの分野でも日本をリードしているように感じました。

物事を俯瞰的に捉えることを意識して、日常に活かしていきたいです。

最初は福島県に1回も来たことがなく美味しいものも食べられそうだったので参加することを決めたのですが、いざ福島に来てみると急に誰かもわからない人の隣に座ってバスが発射しても不安な気持ちになりました。ですが、今まで私の暮らしてきた世界では出会えなかったような人にたくさん出会えたと思います。夜になる頃にはいろんな人と話したりして仲良くなる事ができたのでよかったです。自分自身のやりたいことがわかっていない中、大学について自分の人生について考えるための選択肢が増えたと感じました。

農園体験や原発事故についてなど実際に自分の目で見えて感じるものが多かったため、これからは疑問に思ったことなどを自分自身で行動を起こして納得できるようにしたいです。

今回参加できて、今までの自分にはない、新しい感情を見つけること



ぼくらの提言。

大阪 ↔ 福島

たくさんの友達ができただけの3日間

ができました。ただ話を聞いて、理解しているつもりではなく、実際に行動してみて、自分の目で見て、自分の中で考えるだけでなく、実際に口に出して仲間と協力する、ということを今回改めて感じました。今回参加してみて、福島の事が本当に好きになりました。とても広い田園、皆が一丸となって「風評被害」や「放射線デマ」といった事実とは異なる意見に真摯に立ち向かい、解決に向かう姿には、感動と共に、尊敬を感じることが出来ました。たった2泊3日で、どれだけのことを学べるのだろう。けれど、実際に体験してみて、たった2泊3日だけれど、本当に多くの事を学びました。原発のことはもちろん、ソーラーシェアリングなど、これからの農業の未来を支えていく取り組みを知れて、本当によかったです。

私はこれまで、3.11のことや原発のことを授業で学んだり、TVを見たりして、知ったつもりでいました。毎年、3月11日が来ると、ああ、今年もこの季節か。なんて思ったりもしていました。しかし、今回の未来サミットに参加して、1つ決めたことがあります。ああ、今年もこの季節か。と悲しい気持ちになるのではなく、今、福島ではどのような人がどのような活動をして、復旧に向かっているのか、考えてみることにします。この事を、私のこれからの人生に活かしていきたい

です。
 今回のプログラムに参加させて頂いた事で、知らなかった事、知ろうともしなかった事を実際に見て学ぶ事が出来ました。また、班などの交流の時間があって大学生とも仲良くなれて、とても楽しかったです。
 話を鵜呑みにせず、実際に見てから自分の意見を出そうと思いました。
 請戸小学校では、11年前の津波の被害を目の当たりにしました。思っていたより何も無いことに驚きました。普段の授業風景の写真や落ちている保健室の看板を見て、日常が失われてしまったことを想うと切なくなりました。

また、当時小学生だった方の高校生の時に書いた文集も見ました。とても前向きな文章で復興を感じたのですが、その近くには当時の時刻のまま止まった時計がありました。

アグロエコロジー農園では、不耕起栽培を実際に見ることが出来てとても勉強になりました。高さのない野菜はどうしても雑草に負けやすいこと、小さいうちの草抜きが大変なことなど初めて知りました。不耕起は植物とその根が土を覆っていることで土壌が良くなり、温暖化対策にもなるので理想的だなと思いました。ただ、やはり虫食いも多くてコストもかかるので、流

通にのせるとしたら栽培方法にこだわっていることを伝えつつ別のルートにしないと儲けるのは難しいだろうなとも思いました。

小水力発電やソーラーシェアリングの農園では、エネルギー問題をとっても身近に感じました。原子力発電以外の方法で電気を作って、地域に貢献できることがすごいと思いました。ぶどうは棚栽培なので、ソーラーパネルの支柱をそのまま使えて太陽光発電と相性がいいなと思いました。3分の1遮光で作物を慎重に選ぶ必要がある中、効率的に土地を活用していて、ぶどうと太陽光が好きになりました。

感想 大学生より

自分は南相馬市出身であるため、震災の影響を受けたという経験はあった。しかし、10年以上たった今その記憶は薄れ、このまま過去の出来事のまま忘れていってしまうと思っていた。今回の請戸小学校の見学で被害の大きさや実際に撮られた当時の映像を見て、これは過去の出来事として忘れていってしまうのではなく、語り継いでいくものだと感じた。大阪の高校生には今回見て体験したことを戻った後友人や家族に伝えてほしいと思った。また、自分もそういっ

た伝える場を作ったり、まだ知らない後の世代に作ったりする活動に携わっていきたくと思った。

「キス・ザ・グラウンド」やあだたら食農 schoolfarm で不耕起栽培が将来につながると思うのでこれから自分で農業をする時には不耕起栽培を実践してみたいと思った。

私は県内出身の大学生として参加させていただきました。

県外の視点から福島を見ることで今の福島の風評被害や福島への愛を再認識することができました。

この実践力と行動力を活かし、新潟でも、頑張っていきたいです。

福島県を外から見た意見を聞けたことがよかった。また、集まった人の多様な立場・経験から、自分にとって新しい視点が多いと感じた。

自分の持つ意見に反する意見だとしても、その背景を想像し、1つの意見として、受け入れられる考え方を身につけたい。

参加していた高校生たちのレベル感の高さに圧倒されました。台風でアウトプットの時間が短くなってしまったのは残念でしたが、バスの中での会話などを通して、濃密な時間にする事ができました。

目の前にある機会に、貪欲に挑戦していきたいです。

一緒に食べて一緒に泊まろう

4

VOL.

高校生 未来サミット

